

電脳時代の憂い



いま注目されているプライマリ・ケア医学の四国大会が徳島で行われた。四県からバラエティに富む臨床の発表が続く。単

に病気だけではなく、病人や家族を含めた全人的医療が実践され、嬉しく思う。感銘を受けたのは、徳島大学医学部生の優れた発表の数々だ。内容もプレゼンも秀逸で、スライド画面もお洒落で綺麗なぜこれほど場慣れしているのか尋ねてみた。

すると、高校生までにワード・エクセル・パワーポイントなどのコンピュータ操作が身についているという。現代の若い世代は学童期から情報通信技術 (Information and Communication Technology, ICT) の中で育ってきているのだった。今やウェアラブルコンピュータの時代が到来している。

日本政府は世界最先端 IT 国家創造宣言や学校教

育分野の情報化などを進めてきた。文部科学省もタブレット端末を活用した個別学習や協働学習を推奨している。

国際舞台での活躍を期待し、これらの方針には賛成だ。しかし、医学的に多少懸念することが。幼児期など早過ぎる時期からディスプレイを使うと、心理的な問題がみられることも。実際に鉛筆やクレヨンで字や絵を描き、実像と虚像が混乱しないようにと願う。

人はタッチパネルではなく、皮膚や心への優しいタッチで育まれ成長していく。他人との何気ないコミュニケーションが不可欠だ。電脳的データを超越した共感が求められているように思う。

(医師・音楽家板東浩)

